

國學院大學學術情報リポジトリ

J.W.ウォーターハウスにおける古代ギリシャ風衣装：
19世紀ヴィクトリア朝後期における文芸と古代再興

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 本美, 里紗子, Hommi, Risako メールアドレス: 所属:
URL	https://k-rain.repo.nii.ac.jp/records/2532

論 文 要 旨

学籍番号	203326	氏 名	本美 里紗子
論文題目： J. W. ウォーターハウスにおける古代ギリシャ風衣装 —19 世紀ヴィクトリア朝後期における文芸と古代再興			
J. W. ウォーターハウスは、19 世紀後半にイギリスで活動した画家である。従来の研究では、モデルとなった女性の特徴、当時の文学の一潮流であった「水と女性」との関連性、花の図像、の 3 点において議論が展開する。 しかし、ウォーターハウスが丹念に描いた衣装と、演劇性を帯びた作品に関しては議論がいまだ及んでいない。本論は第一に、1880 年から 1900 年初頭にかけて、円環模様の装飾された衣装と家具の生地について言及する。「ウォーターハウス」という名のごとく、現時点で確認した限り 36 作品に水辺や河川、噴水など水に関連するモチーフを、多くの作品が描写されている。なかでも《嫉妬に燃えるキルケ》(1892 年)と《オルフェウスの首を見つけたニンフたち》(1900 年)は、水辺に佇む女性の衣服全体に、波紋を連想させるような円環模様が装飾される。さらに《神託伺い》(1884 年)、《クレオパトラ》(1888 年)、《ボレアス》(1903 年)、《ダナイデス》(1906 年)、《ペネロペと求婚者たち》(1912 年)、と上記の作品を含む合計 7 点で同様な模様が確認できる。加えて、ウォーターハウスより以前に問題となる衣装を着用した人物像を描いた、ローレンス・アルマ＝タデマによる《フェイディアスとパルテノン神殿のフリーズ》(1868 年)も、分析の比較対象とする。 第二に、1880 年代から顕在化する演劇性を帯びた作品を、当時の演劇で女優が着用した舞台衣装との比較検討を行ない、ウォーターハウスがヴィクトリア朝後期の演劇に関心があつた可能性を指摘する。1888 年にライシウム劇場でマクベス夫人を演じたエレン・テリーは、ジョン・シンガー・サージェントによって《マクベス夫人に扮したエレン・テリー》と題された作品に描かれた。本作品はウォーターハウスによる《オデュッセウスに杯を差し出すキルケ》と《嫉妬に燃えるキルケ》と構図が酷似する。さらに、エレンは唯美主義に傾倒しており、リバティ商会で販売された「唯美主義ドレス」は、彼女の夫が監修している。そのデザインは、古代ギリシャのドレーパリーを模倣しており、ウォーターハウスによる《無為の楽しみ》同タイトル 2 作品においても、その衣装や唯美主義の象徴が描かれる。 以上の 2 点を踏まえ、本論文はウォーターハウスの作品に見られる衣装のモチーフと、実在した 19 世紀後半の名女優の衣装や演技に基づいた画家の作例と比較し、当世の文芸と古代再興との関連性を考察する。			
キーワード (5 語) 劇場・ヴィクトリア朝後期・古代再興・古代ギリシャ風衣装・唯美主義ドレス			